報恩記

芥川龍之介

阿媽港甚内の話

　わたしは甚内と云うものです。苗字は――さあ、世間ではずっと前から、阿媽港甚内と云っているようです。阿媽港甚内、――あなたもこの名は知っていますか？　いや、驚くには及びません。わたしはあなたの知っている通り、評判の高い盗人です。しかし今夜参ったのは、盗みにはいったのではありません。どうかそれだけは安心して下さい。
　あなたは日本にいる伴天連の中でも、道徳の高い人だと聞いています。して見れば盗人と名のついたもの

と、しばらくでも一しょにいると云う事は、愉快ではないかも知れません。が、わたしも思いのほか、盗みばかりしてもいないのです。いつぞや聚楽（じゅらく）の御殿（ごてん）へ召された呂宋助左衛門（るそんすけざえもん）の手代（てだい）の一人も、確か甚内と名乗っていました。また利休居士（りきゅうこじ）の珍重（ちんちょう）していた「赤がしら」と称える水さしも、それを贈った連歌師（れんがし）の本名（ほんみょう）は、甚内（じんない）とか云ったと聞いています。そう云えばつい二三年以前、阿媽港日記（あまかわにっき）と云う本を書いた、大村（おおむら）あたりの通辞（つうじ）の名前も、甚内と云うのではなかったでしょうか？　そのほか三条河原（さんじょうがわら）の喧嘩に、甲比丹（カピタン）「まるどなど」を救った虚無僧（こむそう）、堺（さかい）の妙国寺（みょうこくじ）門前に、

南蛮（なんばん）の薬を売っていた商人、……そう云うものも名前を明かせば、何がし甚内だったのに違いありません。いや、それよりも大事なのは、去年この「さん・ふらんしすこ」の御寺（みてら）へ、おん母「まりや」の爪を収めた、黄金（おうごん）の舎利塔（しゃりとう）を献じているのも、やはり甚内と云う信徒だった筈です。

　しかし今夜は残念ながら、一々そう云う行状を話している暇はありません。ただどうか阿媽港甚内（あまかわじんない）は、世間一般の人間と余り変りのない事を信じて下さい。そうですか？　では出来るだけ手短かに、わたしの用向きを述べる事にしましょう。わたしはある男の魂のた

めに、「みさ」の御祈りを願いに来たのです。いや、わたしの血縁のものではありません。と云ってもまたわたしの刃金（はがね）に、血を塗ったものでもないのです。名前ですか？　名前は、――さあ、それは明かして好（い）いかどうか、わたしにも判断はつきません。ある男の魂のために、――あるいは「ぽうろ」と云う日本人のために、冥福（めいふく）を祈ってやりたいのです。いけませんか？――なるほど阿媽港甚内に、こう云う事を頼まれたのでは、手軽に受合う気にもなれますまい。ではとにかく一通り、事情だけは話して見る事にしましょう。しかしそれには生死を問わず、他言（たごん）しない約束が必要です。

あなたはその胸の十字架（くるす）に懸けても、きっと約束を守りますか？　いや、——失礼は赦（ゆる）して下さい。（微笑）伴天連（ばてれん）のあなたを疑うのは、盗人（ぬすびと）のわたしには僭上（せんじょう）でしょう。しかしこの約束を守らなければ、（突然真面目（まじめ）に）「いんへるの」の猛火に焼かれずとも、現世（げんぜ）に罰（ばち）が下（くだ）る筈です。

もう二年あまり以前の話ですが、ちょうどある凩（こがらし）の真夜中です。わたしは雲水（うんすい）に姿を変えながら、京の町中（まちなか）をうろついていました。京の町中をうろついたのは、その夜（よ）に始まったのではありません。もうかれこれ五日ばかり、いつも初更（しょこう）を過ぎさえすれば、必ず人

目に立たないように、そっと家々を窺(うかが)ったのです。勿論何のためだったかは、詮を入れるにも及びますまい。殊にその頃は摩利伽(まりか)へでも、一時渡っているつもりでしたから、余計に金(かね)の入用もあったのです。

町は勿論とうの昔に人通りを絶っていましたが、星ばかりきらめいた空中には、小(お)やみもない風の音がどよめいています。わたしは暗い軒通(のきづた)いに、小川通(おがわどお)りを下(くだ)って来ると、ふと辻を一つ曲(まが)った所に、大きい角屋敷(かどやしき)のあるのを見つけました。これは京でも名を知られた、北条屋弥三右衛門(ほうじょうややそうえもん)の本宅です。同じ渡海(とかい)を渡世にしていても、北条屋は到底角倉(とうていかどくら)などと肩を並べる

事は出来ますまい。しかしとにかく沙室(しゃむろ)や呂宋(るそん)へ、船の一二艘(そう)も出しているのですから、一かどの分限者(ぶげんしゃ)には違いありません。わたしは何もこの家(うち)を目当に、うろついていたのではないのですが、ちょうどそこへ来合わせたのを幸い、一稼(ひとかせ)ぎする気を起しました。その上前にも云った通り、夜(よ)は深いし風も出ている、——わたしの商売にとりかかるのには、万事持って来いの寸法(すんぽう)です。わたしは路ばたの天水桶(てんすいおけ)の後(うしろ)に、網代(あじろ)の笠や杖を隠した上、たちまち高塀を乗り越えました。

世間の噂(うわさ)を聞いて御覧なさい。阿媽港甚内(あまかわじんない)は、忍術を使う、——誰でも皆そう云っています。しかしあ

なたは俗人のように、そんな事は本当と思いますまい。わたしは忍術も使わなければ、悪魔も味方にはしていないのです。ただ阿媽港にいた時分、葡萄牙の医者に、究理の学問を教わりました。それを実地に役立てさえすれば、大きい錠前を扭じ切ったり、重い閂を外したりするのは、格別むずかしい事ではありません。（微笑）今までにない盗みの仕方、――それも日本と云う未開の土地は、十字架や鉄砲の渡来と同様、やはり西洋に教わったのです。

わたしは一ときとたたない内に、北条屋の家の中にはいっていました。が、暗い廊下をつき当ると、驚い

た事にはこの夜更(よふ)けにも、まだ火影(ほかげ)のさしているばかりか、話し声のする小座敷があります。それがあたりの容子(ようす)では、どうしても茶室に違いありません。「凩(こがらし)の茶か」――わたしはそう苦笑(くしょう)しながら、そっとそこへ忍び寄りました。実際その時は人声のするのに、仕事の邪魔(じゃま)を思うよりも、数寄(すき)を凝らした囲いの中に、この家(や)の主人や客に来た仲間が、どんな風流を楽しんでいるか?――そんな事に心が惹(ひ)かれたのです。

　襖(ふすま)の外に身を寄せるが早いか、わたしの耳には思った通り、釜(かま)のたぎりがはいりました。が、その音がすると同時に、意外にも誰か話をしては、泣いている声

が聞えるのです。誰か、――と云うよりもそれは二度と聞かずに、女だと云う事さえわかりました。こう云う大家の茶座敷に、真夜中女の泣いていると云うのは、どうせただ事ではありません。わたしは息をひそめたまま、幸い明いていた襖の隙から、茶室の中を覗きこみました。

行燈の光に照された、古色紙らしい床の懸け物、懸け花入の霜菊の花。――囲いの中には御約束通り、物寂びた趣が漂っていました。その床の前、――ちょうどわたしの真正面に坐った老人は、主人の弥三右衛門でしょう、何か細かい唐草の羽織に、じっと両腕を組

んだまま、ほとんどよそ眼に見たのでは、釜の煮え音でも聞いているようです。弥三右衛門の下座には、品の好い笄髷の老女が一人、これは横顔を見せたまま、時々涙を拭っていました。

「いくら不自由がないようでも、やはり苦労だけはあると見える。」——わたしはそう思いながら、自然と微笑を洩らしたものです。微笑を、——こう云ってもそれは北条屋夫婦に、悪意があったのではありません。わたしのように四十年間、悪名ばかり負っているものには、他人の、——殊に幸福らしい他人の不幸は、自然と微笑を浮ばせるのです。（残酷な表情）その時

もわたしは夫婦の歎きが、歌舞伎を見るように愉快だったのです。（皮肉な微笑）しかしこれはわたし一人に、限った事ではありますまい。誰にも好まれる草紙と云えば、悲しい話にきまっているようです。

弥三右衛門はしばらくの後、吐息をするようにこう云いました。

「もうこの羽目になった上は、泣いても喚いても取返しはつかない。わたしは明日にも店のものに、暇をやる事に決心をした。」

その時また烈しい風が、どっと茶室を揺すぶりました。それに声が紛れたのでしょう。弥三右衛門の内儀

の言葉は、何と云ったのだかわかりません。が、主人は頷（うなず）きながら、両手を膝の上に組み合せると、網代（あじろ）の天井へ眼を上げました。太い眉（まゆ）、尖った頬骨（ほおぼね）、殊に切れの長い目尻、――これは確かに見れば見るほど、いつか一度は会っている顔です。

「おん主（あるじ）、『えす・きりすと』様。何とぞ我々夫婦の心に、あなた様の御力を御恵み下さい。……」

弥三右衛門は眼を閉じたまま、御祈りの言葉を呟（つぶや）き始めました。老女もやはり夫のように天帝の加護を乞うているようです。わたしはその間（あいだ）瞬きもせず、弥三右衛門の顔を見続けました。するとまた凩（こがらし）の

渡った時、わたしの心に閃いたのは、二十年以前の記憶です。わたしはこの記憶の中に、はっきり弥三右衛門の姿を捉えました。

　その二十年以前の記憶と云うのは、——いや、それは話すには及びますまい。ただ手短に事実だけ云えば、わたしは阿媽港に渡っていた時、ある日本の船頭に危い命を助けて貰いました。その時は互に名乗りもせず、それなり別れてしまいましたが、今わたしの見た弥三右衛門は、当年の船頭に違いないのです。わたしは奇遇に驚きながら、やはりこの老人の顔を見守っていました。そう云えば威かつい肩のあたりや、指節

の太い手の恰好(かっこう)には、未(いまだ)に珊瑚礁(さんごしょう)の潮(しお)けむりや、白檀山(びゃくだんやま)の匂いがしみているようです。

弥三右衛門は長い御祈りを終ると、静かに老女へこう云いました。

「跡はただ何事も、天主(てんしゅ)の御意(ぎょい)次第と思うたが好(よ)い。――では釜のたぎっているのを幸い、茶でも一つ立てて貰おうか？」

しかし老女は今更のように、こみ上げる涙を堪(こら)えるように、消え入りそうな返事をしました。

「はい。――それでもまだ悔(く)やしいのは、――」

「さあ、それが愚痴(ぐち)と云うものじゃ。北条丸(ほうじょうまる)の沈ん

だのも、抛げ銀の皆倒れたのも、――」
「いえ、そんな事ではございません。せめては倅の弥三郎でも、いてくれればと思うのでございますが、……」
わたしはこの話を聞いている内に、もう一度微笑が浮んで来ました。が、今度は北条屋の不運に、愉快を感じたのではありません。「昔の恩を返す時が来た」――そう思う事が嬉しかったのです。わたしにも、御尋ね者の阿媽港甚内にも、立派に恩返しが出来る愉快さは、――いや、この愉快さを知るものは、わたしのほかにはありますまい。（皮肉に）世間の善人は可哀

そうです。何一つ悪事を働かない代りに、どのくらい善行を施した時には、嬉しい心もちになるものか、――そんな事も碌には知らないのですから。

「何、ああ云う人でなしは、居らぬだけにまだしも仕合せなぐらいじゃ。……」

弥三右衛門は苦々しそうに、行燈へ眼を外らせました。

「あいつが使いおった金でもあれば、今度も急場だけは凌げたかも知れぬ。それを思えば勘当したのは、……

……」

弥三右衛門はこう云ったなり、驚いたようにわたし

を眺めました。これは驚いたのも無理はありません。わたしはその時声もかけずに、堺の襖を明けたのですから。——しかもわたしの身なりと云えば、雲水に姿をやつした上、網代の笠を脱いだ代りに、南蛮頭巾をかぶっていたのですから。

「誰だ、おぬしは？」

弥三右衛門は年はとっていても、咄嗟に膝を起しました。

「いや、御驚きになるには及びません。わたしは阿媽港甚内と云うものです。——まあ、御静かになすって下さい。阿媽港甚内は盗人ですが、今夜突然参上した

のは、少しほかにも訣（わけ）があるのです。――」

わたしは頭巾（ずきん）を脱ぎながら、弥三右衛門の前に坐りました。

その後（のち）の事は話さずとも、あなたには推察出来るでしょう。わたしは北条屋（ほうじょうや）の危急（ききゅう）を救うために、三日と云う日限（にちげん）を一日も違えず、六千貫の金（かね）を調達する、恩返しの約束を結んだのです。――おや、誰か戸の外に、足音が聞えるではありませんか？　では今夜は御免下さい。いずれ明日（あす）か明後日（あさって）の夜（よる）、もう一度ここへ忍（しの）んで来ます。あの大十字架（おおくるす）の星の光は阿媽港（あまかわ）の空には輝いていても、日本（にっぽん）の空には見られません。わたしも

ちょうどああ云うように日本では姿を晦(くら)ませていないと、今夜「みさ」を願いに来た、「ぽうろ」の魂のためにもすまないのです。

何、わたしの逃げ途(みち)ですか？　そんな事は心配に及びません。この高い天窓(てんまど)からでも、あの大きい暖炉(だんろ)からでも、自由自在に出て行かれます。ついてはどうか呉々(くれぐれ)も、恩人「ぽうろ」の魂のために、一切他言(たごん)は慎(つつし)んで下さい。

北条屋弥三右衛門の話

伴天連(ばてれん)様。どうかわたしの懺悔(ざんげ)を御聞き下さい。御承知でも御座いましょうが、この頃世上に噂の高い、阿媽港甚内(あまかわじんない)と云う盗人(ぬすびと)がございます。根来寺(ねごろでら)の塔に住んでいたのも、殺生関白(せっしょうかんぱく)の太刀(たち)を盗んだのも、また遠い海の外(そと)では、呂宋(るそん)の太守を襲ったのも、皆あの男だとか聞き及びました。それがとうとう搦(から)めとられた上、今度一条戻(もど)り橋(ばし)のほとりに、曝(さら)し首(くび)になったと云う事も、あるいは御耳にはいって居りましょう。わたしはあの阿媽港甚内に一方(ひとかた)ならぬ大恩を蒙(こうむ)りました。が、また大恩を蒙っただけに、ただ今では何とも申しようのない、悲しい目にも遇(あ)ったのでございます。どうか

その仔細を御聞きの上、罪びと北条屋弥三右衛門にも、天帝の御愛憐を御祈り下さい。

ちょうど今から二年ばかり以前の、冬の事でございます。ずっとしけばかり続いたために、持ち船の北条丸は沈みますし、抛げ銀は皆倒れますし、――それやこれやの重なった揚句、北条屋一家は分散のほかに、仕方のない羽目になってしまいました。御承知の通り町人には取引き先はございましても、友だちと申すものはございません。こうなればもう我々の家業は、うず潮に吸われた大船も同様、まっ逆さまに奈落の底へ、落ちこむばかりなのでございます。するとある夜、

――今でもこの夜の事は忘れません。ある凩の烈しい夜でございましたが、わたし共夫婦は御存知の囲いに、夜の更けるのも知らず話して居りました。そこへ突然はいって参ったのは、雲水の姿に南蛮頭巾をかぶった、あの阿媽港甚内でございます。わたしは勿論驚きもすれば、また怒りも致しました。が、甚内の話を聞いて見ますと、あの男はやはり盗みを働きに、わたしの宅へ忍びこみましたが、茶室には未に火影ばかりか、人の話し声が聞えている、そこで襖越しに、覗いて見ると、この北条屋弥三右衛門は、甚内の命を助けた事のある、二十年以前の恩人だったと、こう云

う次第ではございませんか？

なるほどそう云われて見れば、かれこれ二十年にもなりましょうか、まだわたしが阿媽港（あまかわ）通いの「ふすた」船の船頭を致していた頃、あそこへ船がかりをしている内に、髭（ひげ）さえ碌（ろく）にない日本人を一人、助けてやった事がございます。何でもその時の話では、ふとした酒の上の喧嘩（けんか）から、唐人（とうじん）を一人殺したために、追手（おって）がかかったとか申して居りました。して見ればそれが今日（こんにち）では、あの阿媽港甚内と云う、名代（なだい）の盗人（ぬすびと）になったのでございましょう。わたしはとにかく甚内の言葉も嘘ではない事がわかりましたから、一家のものの寝てい

るのを幸い、まずその用向きを尋ねて見ました。

　すると甚内の申しますには、あの男の力に及ぶ事なら、二十年以前の恩返しに、北条屋の危急を救ってやりたい、差当り(さしあた)入用(いりよう)の金子(きんす)の高は、どのくらいだと尋ねるのでございます。わたしは思わず苦笑(くしょう)致しました。盗人に金を調達して貰う、――それが可笑(おか)しいばかりではございません。いかに阿媽港甚内でも、そう云う金があるくらいならば、何もわざわざわたしの宅へ、盗みにはいるにも当りますまい。しかしその金高(きんだか)を申しますと、甚内は小首(こくび)を傾けながら、今夜の内にはむずかしいが、三日も待てば調達しようと、無造作(むぞうさ)に引

き受けたのでございます。が、何しろ入用なのは、六千貫と云う大金でございますから、きっと調達出来るかどうか、当てになるものではございません。いや、わたしの量見では、まず賽の目をたのむよりも、覚束ないと覚悟をきめていました。

甚内はその夜わたしの家内に、悠々と茶なぞ立てさせた上、凩の中を帰って行きました。が、その翌日になって見ても、約束の金は届きません。二日目も同様でございました。三日目は、——この日は雪になりましたが、やはり夜に入ってしまった後も、何一つ便りはありません。わたしは前に甚内の約束は、当にし

て居らぬと申し上げました。が、店のものにも暇（ひま）を出さず、成行きに任（まか）せていた所を見ると、それでも幾分か心待ちには、待っていたのでございましょう。また実際三日目の夜（よ）には、囲いの行燈（あんどん）に向っていても、雪折れの音のする度毎に、聞き耳ばかり立てて居りました。

所が三更（さんこう）も過ぎた時分、突然茶室の外（そと）の庭に、何か人の組み合うらしい物音が聞えるではございませんか？　わたしの心に閃（ひらめ）いたのは、勿論（もちろん）甚内の身の上でございます。もしや捕り手（とて）でもかかったのではないか？――わたしは咄嗟（とっさ）にこう思いましたから、庭に向

いた障子を明けるが早いか、行燈の火を掲げて見ました。雪の深い茶室の前には、大明竹の垂れ伏したあたりに、誰か二人摑み合っている——と思うとその一人は、飛びかかる相手を突き放したなり、庭木の陰をくぐるように、たちまち塀の方へ逃げ出しました。雪のはだれる音、塀に攀じ登る音、——それぎりひっそりしてしまったのは、もうどこか塀の外へ、無事に落ち延びたのでございましょう。が、突き放された相手の一人は、格別跡を追おうともせず、体の雪を払いながら、静かにわたしの前へ歩み寄りました。

「わたしです。阿媽港甚内ですよ。」

わたしは呆気(あっけ)にとられたまま、甚内の姿を見守りました。甚内は今夜も南蛮頭巾(なんばんずきん)に、袈裟法衣(けさころも)を着ているのでございます。

「いや、とんだ騒(さわ)ぎをしました。誰もあの組打ちの音に、眼を覚さねば仕合せですが。」

甚内は囲(かこ)いへはいると同時に、ちらりと苦笑(くしょう)を洩(も)らしました。

「何、わたしが忍(しの)んで来ると、ちょうど誰かこの床(ゆか)の下へ、這(は)いこもうとするものがあるのです。そこで一つ手捕(てど)りにした上、顔を見てやろうと思ったのですが、とうとう逃げられてしまいました。」

わたしはまださっきの通り、捕り手の心配がございましたから、役人ではないかと尋ねて見ました。が、甚内は役人どころか、盗人だと申すのでございます。盗人が盗人を捉えようとした、——このくらい珍しい事はございますまい。今度は甚内よりもわたしの顔に、自然と苦笑が浮びました。しかしそれはともかくも、調達の成否を聞かない内は、わたしの心も安まりません。すると甚内は云わない先に、わたしの心を読んだのでございましょう、悠々と胴巻をほどきながら、炉の前へ金包みを並べました。

「御安心なさい、六千貫の工面はつきましたから。——

——実はもう昨日の内に、大抵調達したのですが、まだ二百貫ほど不足でしたから、今夜はそれを持って来ました。どうかこの包みを受け取って下さい。また昨日までに集めた金は、あなた方御夫婦も知らない内に、この茶室の床下へ隠して置きました。大方今夜の盗人のやつも、その金を嗅ぎつけて来たのでしょう。」

わたしは夢でも見ているように、そう云う言葉を聞いていました。盗人に金を施して貰う、——それはあなたに伺わないでも、確かに善い事ではございますまい。しかし調達が出来るかどうか、半信半疑の境にいた時は、善悪も考えずに居りましたし、また今と

なって見れば、むげに受け取らぬとも申されません。しかもその金を受け取らないとなれば、わたしばかりか一家のものも、路頭(ろとう)に迷うのでございます。どうかこの心もちに、せめては御憐憫(ごれんびん)を御加え下さい。わたしはいつか甚内の前に、恭(うやうや)しく両手をついたまま、何も申さずに泣いて居りました。……

　その後(のち)わたしは二年の間(あいだ)、甚内の噂(うわさ)を聞かずに居りました。が、とうとう分散もせずに恙(つつが)ないその日を送られるのは、皆甚内の御蔭でございますから、いつでもあの男の仕合せのために、人知れずおん母「まりや」様へも、祈願(きがん)をこめていたのでございます。と

ころがどうでございましょう、この頃往来の話を聞けば、阿媽港甚内は御召捕りの上、戻り橋に首を曝していると、こう申すではございませんか？　わたくしは驚きも致しました。人知れず涙も落しました。しかし積悪の報と思えば、これも致し方はございますまい。いや、むしろこの永年、天罰も受けずに居りましたのは、不思議だったくらいでございます。が、せめてもの恩返しに、陰ながら回向をしてやりたい。――こう思ったものでございますから、わたしは今日伴もつれずに、早速一条戻り橋へ、その曝し首を見に参りました。

戻り橋のほとりへ参りますと、もうその首を曝した前には、大勢(おおぜい)人がたかって居ります。罪状を記(しる)した白木(しらき)の札(ふだ)、首の番をする下役人(したやくにん)——それはいつもと変りません。が、三本組合せた、青竹の上に載せてある首は、——ああ、そのむごたらしい血まみれの首は、どうしたと云うのでございましょう？　わたしは騒々(そうぞう)しい人だかりの中に、蒼(あお)ざめた首を見るが早いか、思わず立ちすくんでしまいました。この首はあの男ではございません。阿媽港甚内の首ではございません。この太い眉(まゆ)、この突き出た頬(ほお)、この眉間(みけん)の刀創(かたなきず)、——何一つ甚内には似て居りません。しかし、——わたしは

突然日の光も、わたしのまわりの人だかりも、竹の上に載せた曝(さら)し首も、皆どこか遠い世界へ、流れてしまったかと思うくらい、烈しい驚きに襲われました。この首は甚内ではございません。わたしの首でございます。二十年以前のわたし、——ちょうど甚内の命を助けた、その頃のわたしでございます。「弥三郎(やさぶろう)！」——わたしは舌さえ動かせたなら、こう叫んでいたかも知れません。が、声を揚げるどころかわたしの体は瘧(おこり)を病んだように、震(ふる)えているばかりでございました。

弥三郎！　わたしはただ幻のように、伜(せがれ)の曝し首を眺めました。首はやや仰向(あおむ)いたまま半ば開(ひら)いた瞼(まぶた)

の下から、じっとわたしを見守って居ります。これはどうした訣でございましょう？　倅は何かの間違いから、甚内と思われたのでございましょうか？　しかし御吟味も受けたとすれば、そう云う間違いは起りますまい。それとも阿媽港甚内というのは、倅だったのでございましょうか？　わたしの宅へ来た贋雲水は、誰か甚内の名前を仮りた、別人だったのでございましょうか？　いや、そんな筈はございません。三日と云う日限を一日も違えず、六千貫の金を工面するものは、この広い日本の国にも、甚内のほかに誰が居りましょう？　して見ると、——その時わたしの心の中には、

二年以前雪の降った夜、甚内と庭に争っていた、誰とも知らぬ男の姿が、急にはっきり浮んで参りました。あの男は誰だったのでございましょう？　もしや倅ではございますまいか？　そう云えばあの男の姿かたちは、ちらりと一目見ただけでも、どうやら倅の弥三郎に、似ていたようでもございます。しかしこれはわたし一人の、心の迷いでございましょうか？　もし倅だったとすれば、――わたしは夢の覚めたように、しげしげ首を眺めました。するとその紫ばんだ、妙に緊りのない唇には、何か微笑に近い物が、ほんのり残っているのでございます。

曝し首に微笑が残っている、——あなたはそんな事を御聞きになると、御晒いになるかも知れません。わたしさえそれに気のついた時には、眼のせいかとも思いました。が、何度見直しても、その干からびた唇には、確かに微笑らしい明みが、漂っているのでございます。わたしはこの不思議な微笑に、永い間見入って居りました。と、いつかわたしの顔にも、やはり微笑が浮んで参りました。しかし微笑が浮ぶと同時に、眼には自然と熱い涙も、にじみ出して来たのでございます。

「お父さん、勘忍して下さい。——」

その微笑は無言の内に、こう申していたのでございます。

「お父さん。不孝の罪は勘忍して下さい。わたしは二年以前の雪の夜、勘当の御詫びがしたいばかりに、そっと家へ忍んで行きました。昼間は店のものに見られるのさえ、恥しいなりをしていましたから、わざわざ夜の更けるのを待った上、お父さんの寝間の戸を叩いても、御眼にかかるつもりでいたのです。ところがふと囲いの障子に、火影のさしているのを幸い、そこへ怯ず怯ず行きかけると、いきなり誰か後から、言葉もかけずに組つきました。

「お父さん。それから先はどうなったか、あなたの知っている通りです。わたしは余り不意だったため、お父さんの姿を見るが早いか、相手の曲者（くせもの）を突き放したなり、高塀（たかべい）の外へ逃げてしまいました。が、雪明り（ゆきあかり）に見た相手の姿は、不思議にも雲水（うんすい）のようでしたから、誰も追う者のないのを確かめた後（のち）、もう一度あの茶室の外へ、大胆（だいたん）にも忍んで行ったのです。わたしは囲いの障子越しに、一切（いっさい）の話を立ち聞きました。

「お父さん。北条屋（ほうじょうや）を救った甚内（じんない）は、わたしたち一家の恩人です。わたしは甚内の身に危急（ききゅう）があれば、たとえ命は抛（なげう）っても、恩に報いたいと決心しました。ま

たこの恩を返す事は、勘当を受けた浮浪人のわたしでなければ出来ますまい。わたしはこの二年間、そう云う機会を待っていました。そうして、――その機会が来たのです。どうか不孝の罪は勘忍して下さい。わたしは極道に生れましたが、一家の大恩だけは返しました。それがせめてもの心やりです。……」

　わたしは宅へ帰る途中も、同時に泣いたり笑ったりしながら、倅のけなげさを褒めてやりました。あなたは御存知になりますまいが、倅の弥三郎もわたしと同様、御宗門に帰依して居りましたから、もとは「ぽうろ」と云う名前さえも、頂いて居ったものでござい

ます。しかし、――しかし倅も不運なやつでございました。いや、倅ばかりではございません。わたしもあの阿媽港甚内（あまかわじんない）に一家の没落さえ救われなければ、こんな嘆きは致しますまいに。いくら未練（みれん）だと思いましても、こればかりは切（せつ）のうございます。分散せずにいた方が好（よ）いか、倅を殺さずに置いた方が好いか、――（突然苦しそうに）どうかわたしを御救い下さい。わたしはこのまま生きていれば、大恩人の甚内を憎むようになるかも知れません。……………（永い間（あいだ）の歔欷（すすりなき））

「ぽうろ」弥三郎の話

ああ、おん母「まりや」様！　わたしは夜(よ)が明け次第、首を打たれる事になっています。わたしの首は地に落ちても、わたしの魂(たましい)は小鳥のように、あなたの御側へ飛んで行くでしょう。いや、悪事ばかり働いたわたしは、「はらいそ」（天国）の荘厳(しょうごん)を拝する代りに、恐しい「いんへるの」（地獄）の猛火の底へ、逆落(さかおと)しになるかも知れません。しかしわたしは満足です。わたしの心には二十年来、このくらい嬉しい心もちは、宿った事がないのです。

わたしは北条屋弥三郎(ほうじょうややさぶろう)です。が、わたしの曝(さら)し首(くび)は、

阿媽港甚内（あまかわじんない）と呼ばれるでしょう。わたしがあの阿媽港甚内、——これほど愉快（ゆかい）な事があるでしょうか？　阿媽港甚内、——どうです？　好（い）い名前ではありませんか？　わたしはその名前を口にするだけでも、この暗い牢（ろう）の中さえ、天上の薔薇（ばら）や百合（ゆり）の花に、満ち渡るような心もちがします。

　忘れもしない二年前（ぜん）の冬、ちょうどある大雪の夜（よる）です。わたしは博奕（ばくち）の元手（もとで）が欲しさに、父の本宅へ忍びこみました。ところがまだ囲いの障子（しょうじ）に、火影（ほかげ）がさしていましたから、そっとそこを窺（うかが）おうとすると、いきなり誰か言葉もかけず、わたしの襟上（えりがみ）を捉（とら）えたものが

あります。振り払う、また摑みかかる、――相手は誰だか知らないのですが、その力の逞しい事は、到底ただものとは思われません。のみならず二三度揉み合う内に、茶室の障子が明いたと思うと、庭へ行燈をさし出したのは、紛れもない父の弥三右衛門です。わたしは一生懸命に、摑まれた胸倉を振り切りながら、高塀の外へ逃げ出しました。

しかし半町ほど逃げ延びると、わたしはある軒下に隠れながら、往来の前後を見廻しました。往来には夜目にも白々と、時々雪煙りが揚るほかには、どこにも動いているものは見えません。相手は諦めてし

まったのか、もう追いかけても来ないようです。が、あの男は何ものでしょう？　咄嗟の間に見た所では、確かに僧形をしていました。が、さっきの腕の強さを見れば、——殊に兵法にも精しいのを見れば、世の常の坊主ではありますまい。第一こう云う大雪の夜に、庭先へ誰か坊主が来ている、——それが不思議ではありませんか？　わたしはしばらく思案した後、たとい危い芸当にしても、とにかくもう一度茶室の外へ、忍び寄る事に決心しました。

それから一時ばかりたった頃です。あの怪しい行脚の坊主は、ちょうど雪の止んだのを幸い、小川通りを

下って行きました。これが阿媽港甚内なのです。侍、連歌師、町人、虚無僧、——何にでも姿を変えると云う、洛中に名高い盗人なのです。わたしは後から見え隠れに甚内の跡をつけて行きました。その時ほど妙に嬉しかった事は、一度もなかったのに違いありません。阿媽港甚内！　阿媽港甚内！　わたしはどのくらい夢の中にも、あの男の姿を慕っていたでしょう。殺生関白の太刀を盗んだのも甚内です。沙室屋の珊瑚樹を詐ったのも甚内です。備前宰相の伽羅を切ったのも、甲比丹「ぺれいら」の時計を奪ったのも、一夜に五つの土蔵を破ったのも、八人の参河侍を斬り倒

したのも、――そのほか末代にも伝わるような、稀有(けう)の悪事を働いたのは、いつでも阿媽港甚内(あまかわじんない)です。その甚内は今わたしの前に、網代(あじろ)の笠を傾けながら、薄明るい雪路を歩いている。――こう云う姿を眺められるのは、それだけでも仕合せではありませんか？　が、わたしはこの上にも、もっと仕合せになりたかったのです。

　わたしは浄厳寺(じょうごんじ)の裏へ来ると、一散(いっさん)に甚内へ追いつきました。ここはずっと町家(ちょうか)のない土塀(どべい)続きになっていますから、たとい昼でも人目を避けるには、一番御誂(おあつら)えの場所なのですが、甚内はわたしを見ても、格

別驚いた気色は見せず、静かにそこへ足を止めました。しかも杖をついたなり、わたしの言葉を待つように、一言も口を利かないのです。わたしは実際恐る恐る、甚内の前に手をつきました。しかしその落着いた顔を見ると、思うように声さえ出て来ません。

「どうか失礼は御免下さい。わたしは北条屋弥三右衛門の倅弥三郎と申すものです。――」

わたしは顔を火照らせながら、やっとこう口を切りました。

「実は少し御願いがあって、あなたの跡を慕って来たのですが、……」

甚内はただ頷きました。それだけでも気の小さいわたしには、どのくらい難有い気がしたでしょう。わたしは勇気も出て来ましたから、やはり雪の中に手をついたなり、父の勘当を受けている事、今はあぶれもののの仲間にはいっている事、今夜父の家へ盗みにはいった所が、計らず甚内にめぐり合った事、なおまた父と甚内との密談も一つ残らず聞いた事、——そんな事を手短に話しました。が、甚内は不相変、黙然と口を噤んだまま、冷やかにわたしを見ているのです。わたしはその話をしてしまうと、一層膝を進ませながら、甚内の顔を覗きこみました。

「北条一家の蒙った恩は、わたしにもまたかかっています。わたしはその恩を忘れないしるしに、あなたの手下になる決心をしました。どうかわたしを使って下さい。わたしは盗みも知っています。火をつける術も知っています。そのほか一通りの悪事だけは、人に劣らず知っています。——」

しかし甚内は黙っています。わたしは胸を躍らせながら、いよいよ熱心に説き立てました。

「どうかわたしを使って下さい。わたしは必ず働きます。京、伏見、堺、大阪、——わたしの知らない土地はありません。わたしは一日に十五里歩きます。力も

四斗俵は片手に挙ります。人も二三人は殺して見ました。どうかわたしを使って下さい。わたしはあなたのためならば、どんな仕事でもして見せます。伏見の城の白孔雀も、盗めと云えば、盗んで来ます。『さん・ふらんしすこ』の寺の鐘楼も、焼けと云えば焼いて来ます。右大臣家の姫君も、拐せと云えば拐して来ます。奉行の首も取れと云えば、——」

わたしはこう云いかけた時、いきなり雪の中へ蹴倒されました。

「莫迦め！」

甚内は一声叱ったまま、元の通り歩いて行きそうに

します。わたしはほとんど気違いのように法衣(ころも)の裾(すそ)へ縋(すが)りつきました。

「どうかわたしを使って下さい。わたしはどんな場合にも、きっとあなたを離れません。あなたのためには水火にも入ります。あの『えそぽ』の話の獅子王(ししおう)さえ、鼠(ねずみ)に救われるではありませんか？　わたしはその鼠になります。わたしは、――」

「黙れ。甚内は貴様なぞの恩は受けぬ。」

甚内はわたしを振り放すと、もう一度そこへ蹴倒しました。

「白癩(びゃくらい)めが！　親孝行でもしろ！」

わたしは二度目に蹴倒された時、急に口惜しさがこみ上げて来ました。

「よし！　きっと恩になるな！」

しかし甚内は見返りもせず、さっさと雪路を急いで行きます。いつかさし始めた月の光に網代の笠を仄めかせながら、……それぎりわたしは二年の間、ずっと甚内を見ずにいるのです。（突然笑う）「甚内は貴様なぞの恩は受けぬ」……あの男はこう云いました。しかしわたしは夜の明け次第、甚内の代りに殺されるのです。

ああ、おん母「まりや様！」わたしはこの二年間、

甚内の恩を返したさに、どのくらい苦しんだか知れません。恩を返したさに？――いや、恩と云うよりも、むしろ恨（うらみ）を返したさにです。しかし甚内はどこにいるか？　甚内は何をしているか？――誰にそれがわかりましょう？　第一甚内はどんな男か？――それさえ知っているものはありません。わたしが遇（あ）った贋雲水（にせうんすい）は四十前後の小男です。が、柳町（やなぎまち）の廓（くるわ）にいたのは、まだ三十を越えていない、赧（あか）ら顔に鬚（ひげ）の生えた、浪人だと云うではありませんか？　歌舞伎（かぶき）の小屋を擾（さわ）がしたと云う、腰の曲った紅毛人（こうもうじん）、妙国寺（みょうこくじ）の財宝（ざいほう）を掠（かす）めたと云う、前髪の垂れた若侍、――そう云うのを皆甚内

とすれば、あの男の正体を見分ける事さえ、到底人力には及ばない筈です。そこへわたしは去年の末から、吐血の病に罹ってしまいました。

　どうか恨みを返してやりたい、——わたしは日毎に痩せ細りながら、その事ばかりを考えていました。するとある夜わたしの心に、突然閃いた一策があります。「まりや」様！　「まりや」様！　この一策を御教え下すったのは、あなたの御恵みに違いありません。ただわたしの体を捨てる、吐血の病に衰え果てた、骨と皮ばかりの体を捨てる、——それだけの覚悟をしさえすれば、わたしの本望は遂げられるのです。わたしはそ

の夜(よ)嬉しさの余り、いつまでも独り笑いながら、同じ言葉を繰返していました。——「甚内の身代(みがわ)りに首を打たれる。甚内の身代りに首を打たれる。……」

甚内の身代りに首を打たれる——何とすばらしい事ではありませんか？　そうすれば勿論わたしと一しょに、甚内の罪も亡(ほろ)んでしまう。——甚内は広い日本国(にっぽん)中、どこでも大威張(おおいばり)に歩けるのです。その代り（再び笑う）——その代りわたしは一夜の内に、稀代(きだい)の大賊(たいぞく)になれるのです。呂宋助左衛門(るそんすけざえもん)の手代(てだい)だったのも、備前宰相(びぜんさいしょう)の伽羅(きゃら)を切ったのも、利休居士(りきゅうこじ)の友だちになったのも、沙室屋(しゃむろや)の珊瑚樹(さんごじゅ)を詐(かた)ったのも、伏見の城

の金蔵を破ったのも、八人の参河侍を斬り倒したのも、——ありとあらゆる甚内の名誉は、ことごとくわたしに奪われるのです。（三度笑う）云わば甚内を助けると同時に、甚内の名前を殺してしまう、一家の恩を返すと同時に、わたしの恨みも返してしまう、——このくらい愉快な返報はありません。わたしがその夜嬉しさの余り、笑い続けたのも当然です。今でも、——この牢の中でも、これが笑わずにいられるでしょうか？

　わたしはこの策を思いついた後、内裏へ盗みにはいりました。宵闇の夜の浅い内ですから、御簾越しに火影がちらついたり、松の中に花だけ仄めいたり、—

——そんな事も見たように覚えています。が、長い廻廊の屋根から、人気のない庭へ飛び下りると、たちまち四五人の警護の侍に、望みの通り搦められました。その時です。わたしを組み伏せた鬚侍は、一生懸命に縄をかけながら、「今度こそは甚内を手捕りにしたぞ」と、呟いていたではありませんか？　そうです。阿媽港甚内のほかに、誰が内裏なぞへ忍びこみましょう？　わたしはこの言葉を聞くと、必死にもがいている間でも、思わず微笑を洩らしたものです。

「甚内は貴様なぞの恩にはならぬ。」——あの男はこう云いました。しかしわたしは夜の明け次第、甚内の

代りに殺されるのです。何と云う気味の好い面当てでしょう。わたしは首を曝されたまま、あの男の来るのを待ってやります。甚内はきっとわたしの首に、声のない哄笑を感ずるでしょう。「どうだ、弥三郎の恩返しは？」――その哄笑はこう云うのです。「お前はもう甚内では無い。阿媽港甚内はこの首なのだ、あの天下に噂の高い、日本第一の大盗人は！」（笑う）ああ、わたしは愉快です。このくらい愉快に思った事は、一生にただ一度です。が、もし父の弥三右衛門に、わたしの曝し首を見られた時には、――（苦しそうに）勘忍して下さい。お父さん！　吐血の病に罹ったわたし

は、たとい首を打たれずとも、三年とは命は続かないのです。どうか不孝は勘忍して下さい、わたしは極道（ごくどう）に生まれましたが、とにかく一家の恩だけは返す事が出来たのですから、……

（大正十一年三月）

底本：「芥川龍之介全集４」ちくま文庫、筑摩書房
１９８７（昭和62）年１月27日第１刷発行
１９９３（平成５）年12月25日第６刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
１９７１（昭和46）年３月〜１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９８年12月19日公開
２００４年３月10日修正